

# コルドバの土は赤かった

## La tierra de Córdoba era roja.

### 続・特派員Gスペインに行く



CGで再現されたローマ時代の大劇場 スペインにおけるコルドバの重要性を窺うことができる



市中に立つ、ローマ時代のオーダー(柱)



第3巻第12号  
通巻第47号

「コスモポリタン」という言葉をご存知だろうか。ああ、あの雑誌ね、と答える人がいるかもしれないが、女性ファッション誌のことではない。遡れば、紀元前四世紀の、樽の中の哲人ディオゲネスに由来すると言われる語で、世界、あるいは宇宙というべきか、を一つの都市、ひとつの国家と考える人々のことである。

インターネットの普及に伴い、国境を越えて生きる人が少しは現実味を帯びてきた今日ではある。しかしながら、国境のように具体的に定義されている境界線、あるいは、海や川、山のように地勢の上での境界線、そんなものを越えるのでさえ、実のところ、一苦労である。そればかりではなく、この世界にはまだまだ様々な、越え難い壁が存在することは、ご承知の通り。

あらゆる壁を取り払われ、誰もが自由に考え、自由に交じり合える世界がやってきたら素晴らしいだろう。そう思う。そうは思わなくても。

私は杉並で生まれ育ち、未だに、界限をうろつろつしているばかりの人間である。滅多にこの町から出ることはない。幼稚園や小学校の同級生の多くは、杉並で生まれ育った人々である。杉並訛りで話し、杉並ローカルで遊び集ったものだ。しかし、その親の世代は東京の人ではないことが多かったことを思い出す。夏休みや冬休み、同級生たちの多くは、母親や父親の郷里に旅立ってゆくのであった。杉並生まれの彼女たちが、なぜか

「お父さんのいなかに戻るんだ」という風に語る。ところが、好奇心を刺激したという要素もある。「帰る」という語には、私の知らない何か別の意味が隠されているのではないかと。実際のところ、彼らは両親の表現を真似していたに過ぎないにせよ、いなか、そこは私には手の届かない、何か特別な場所だ、と思わせるには十分なエネルギーがあった。

普段は混み合う団地の中央広場もお盆の頃には東京に取り残された子どもたちがちらほらと遊ばかり。いなかってこんなところなんだろつなあ、と、ボールを蹴りながら考えた。ベッドに寝転がり、見たことのないいなかというものを想像した。自転車で神明町のじいさんばあさんのところに遊びに行ったりすることはあったけれど、行程4キロにも満たず、「いなか」と呼ぶには如何にも相応しくなかった。それに、母は実家に帰る、という表現は使わない。神明に行ってくるよ、である。では、父親の実家はどうかというと、なお近く、阿佐ヶ谷圏内。自転車も不要、徒歩でどうぞ。ううむ、郷愁という響きからは程遠い。

こんな具合の少年時代。故郷というのか古里というのか、呼び方はともかくも、小さい頃にはそういうものに憧れた時期があったのは確かである。今になってみれば、いなかというところがどんなものなのかを思い描くことはそれほど難しくはない。

(最終面に続く)

**今日の紙面から**

- 二面 オーラ面
- 三画 ポンパン
- 三画 芸術面
- レイスギヤラリー
- 四画 からすライブラリー
- アート 『オスカー・ニーマイヤー』
- 本 『方言の地図帳』
- 映画 『リトル・ダンサー』
- 六画 国際面
- Gレポートの詳細
- 七画 英語面
- 三単現を無視?

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

# 松本と語る「パピヨン」

冬が始まっています。そのくせ台風二十五号が接近してたりもするのだけれども。皆さんいかがお過ごしでしょうか？

ところで皆さん、この時期になると決まって聞きたくなる音楽はないですか？自分の場合、確実にビートルズ、またはジョン・レノン/ポール・マッカートニーです。(あとマッドネスもありますが)。その中でもビートルズのラバー・ソウル、ホワイト・アルバム、ジョンは、ダブル・ファンタジーであり、ポールはシングルのマル・オブ・キングダムであります。なぜなのかわりません。しかし、調べてみるとそれらは全てOctoberやNovember発売だったりします。共通項。全て「外は冷たい曇り空。時は午後遅い時間から夕方。自分は独り部屋の中にいて、ヒーターはついているもののセーター着込んで暖かい紅茶を飲みながら心は色んなことをキヤッチしたり色んなところにキヤッチされたりしながら心地よく彷徨っている。」そのような絵が浮かんでいきます。

今年の冬。ついこの間までポールが来日していた。やっぱり、この時期か。でも行かなかった。ポールの音楽はめっちゃくちゃ好きなのだがやはり人間的には合わない。なんでS席が一四〇〇〇円やねん？九年前、まだパプルの余韻に日本社会が浸っていた時は七八〇〇円だったのだ。そう、その時は当然行きませんでした。二公演に。行っていっぱい泣きましたよ。生ハイ・ジュード、生キヤリー・ザット・ウエイト、生フル・オン・ザ・ヒル、生オール・マイ・ラビング、生サー・ジェント・ベッパーズ、生~~~~もうこの辺にしとこう。キリない。

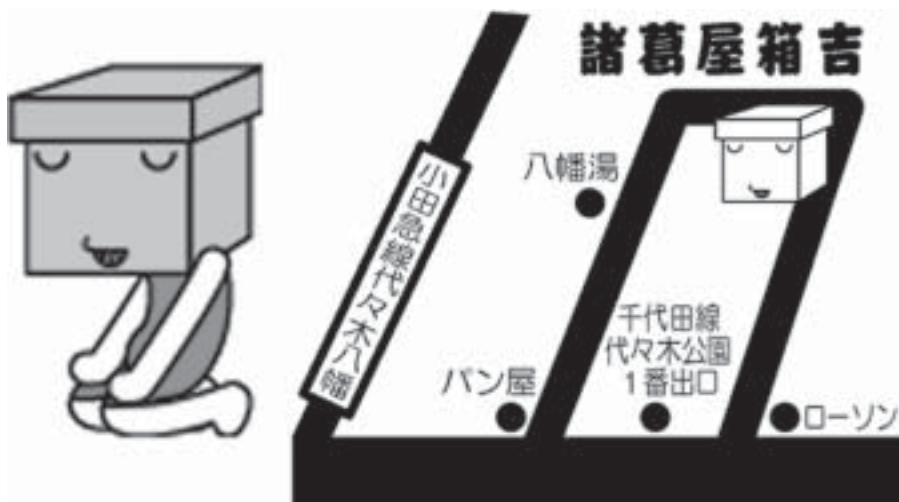
一公演はそついえば正俊つつあんと一緒だったな。(覚えてるか、オヤジ？逃げるな、オヤジ！しかしあれから九年も？お互い くなりましたな。)それから時は移り、パプルはとつくの昔に歴史用語となり、いまはデフレの時代。物価安が日本経済のネックになってしまった時代。それなのにこのポール脚のやり方は解せない。でも彼の意図は憶測は出来ている。(ヒント。このツアーはアメリカでの「Paul for New York」ツアーの延長である。そして元来は日本ツアーは予定されてなかった。ちなみにアメリカ以外では日本で行われていない。そして今回のツアーの曲目は前回の九年前とほとんど変わってないのである。

そんな陰に隠れて時期を同じくしてジョージの新譜(遺作)が発売されていた。ほんとにどこまでこの人はポールやジョンに邪魔される人なのだろう。今その曲をかけながらキーを叩いています。すごくさわやかです。明るい。今までのジョージのアルバムの中では最もそうなのではないか？死を目前としているのに何でこんなポジティブな音を奏でられるのだろう。

「死は大したことではない。魂が身体から離れるだけのこと。魂はいつだってこの世に存在し続けるんだよ。」とジョンが死んだときにジョージは言っていた。今思う。彼は本気だったんだな。いやむしろ彼は死を歓迎していたのかも知れないな、身体という呪縛から離れてほんとの自由へと旅立つ儀式と捕らえていたのではないか、とさえ思えてくる。

PS. 十一曲目の「Rocking Chair in Hawaii」は魂の曲です。今述べたことに確信を持たせてくれる。むちゃくちゃいいです。

## 架空 空間



8月3日はちみつの日に諸葛屋箱吉にて、岩間玲の組むアートユニット

架空 プロジェクトが作品を展示します。題して『架空 空間』。

お客さん参加型のボックスオブジェを発表。

場所：渋谷区富ヶ谷1-3-3 スズキビル1階

小田急線代々木八幡徒歩2分

営業時間 12:00 ~ 20:00 水曜日定休

tel:03-3485-1492

<http://www.hakokichi.com>

## Rei's Gallery



## 八八ネココネコ

この前、「老人力」でお馴染み路上観察家の赤瀬川原平氏の写真集「猫の宇宙」を購入。赤瀬川氏は自分から猫に歩み寄ってシャッターを切るという感じではなくて、たまたま出会った猫をちよつと離れた場所から、猫の世界、猫の宇宙をそつと切り取っていました。そして私も、猫の宇宙を覗き見。酒壺の横に母猫と子猫。壺も猫の親子も似たような曲線を作っていて、柔らかな猫の宇宙が広がっていました。



## オスカー・ニーマイヤー

Oscar Niemeyer

galerie national du Jeu de Paume

DVD 作品

production ARTE France, Panic Productions (Paris),  
Wajnbrose Productions (Bruxelles), RTBF(Télévision  
belge), Polo de Imagem(São Paulo)

60min.

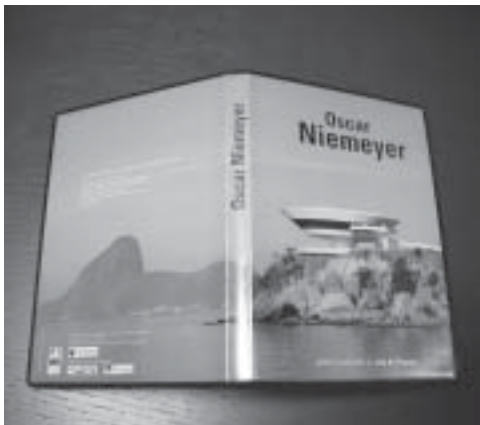


Art

少し前のSF映画の風景はこのよつな感じではなかっただろうが。でも、これは実際に建っている現代美術館なのだ。設計者は、ブラジルのオスカー・ニーマイヤー。人間の作った九十度の角やまっすぐな直線ではなく、自由に繊細な曲線が私を魅了する。故郷の山や海岸で出会った自然のライン、さざ波や女性にそなわる柔らかなカーブ。世界は曲線でできている、と言った彼の作品は、不思議な魅力をもっている。

このDVDは、今年初め(二月五日から三月三十一日まで)フランスで行われた展覧会にあわせて作成されたものである。実際にブラジルまで赴いてその空間を体験できるチャンスはそうあるものではなかつた。画面からは、空間のシックエッセンスや、石などのマテリアルの存在感すらも充分に感じ取ることができる。

(篠崎健一)



## 『方言の地図帳』

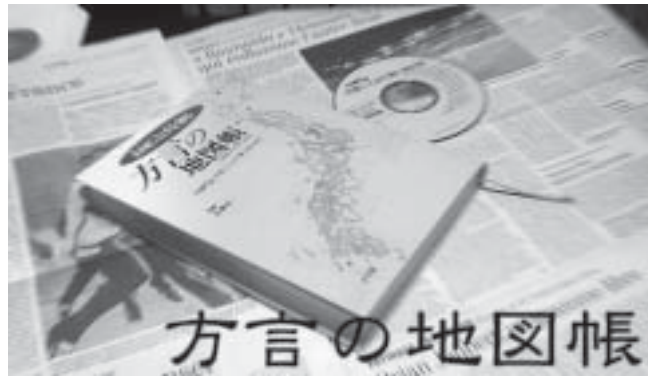
佐藤 亮一 監修

小学館、2002年

ISBN:-4-09-501452-8



Books



書名からもわかるように、単語の分布を地図上に表示することがメインなのだろう。その一方で、音韻の解説や、方言研究の基礎知識的な概説もある。親切な本なんだろう。しかしながら、専門家には物足りないだろうし、私のような素人には面白みに欠けるような、どっちつかずのものだとも言える。それでいながら、この本を是非とも推したくなったのは、そのおまけにある。「お国ことばで聞く桃太郎」というCD。本編同様、わずか十四地域からしか収録されていない、という中途半端さだが、それでも、音声による情報はどんなに多くの文字を並べてみても太刀打ちできないだけの力がある。

ヘッドフォンをかけて、夜半にこっそり青森から沖縄までの方言の旅をする。うーむ、あまりにも怪しい姿だが、一度お試しあれ。

(全大)



## 『リトル・ダンサー』

BILLY ELLIOT

監督：スティーヴン・ダルドリー

主演：ジェイミー・ベル

ASBY-5122 2000年制作 イギリス



Film



最近、近所に住む女の子がこの映画のビデオを貸してくれた。「どんな映画?」  
の問いに、彼女の第一声が「炭坑がつぶれちゃうの」なるほどなるほど。

昨今のイギリス経済は一応好調ということになっているが、かつてのどん底英国病からの脱却は、すべて80年代のサッチャーによる強権的廃坑断行にはじまった。炭坑は、産業革命以来の古き良き英国経済の象徴的存在だったから、乗り越えるまでに各地でかなりの大騒ぎとなった。あれらの騒動を抜きして現在のイギリスを語ることはできない。

ひところアメリカ映画にベトナム戦争を描いた作品が相継いだことがあったが、サッチャー後のイギリスでは、廃坑騒動をバックグラウンドにした作品が多く撮られている。映画界にとっても乗り越えるべき題材だったのだろう。

物語だが、父と兄は、廃坑に猛反対してスト突入中。そんな中、主人公の少年はあろうことかバレエに興味を持つ。炭坑夫の息子が、そんな女のやるようなバレエなんぞ、絶対許されてはならないのだが、どうやら彼には才能があるらしい……。

武骨な男たちと少年の無垢な感性。特に主人公の親友のゲイ少年がなんともおかしい。なんとなく一歩引いた感じのイギリス的な小道具が随所にちりばめられた作品である。

(望月)

外人さん

その言えは最近、ここに住んでいること自体当たり前のようになり、随分と新鮮に感じる事が少なくなっている。それでも頭の中の何処か片隅で、自分分は外国に居るとい意識が存在し続けているから不思議だ。その意識は何か、例えば海外を一人で旅しているそれ、もしくは海外旅行で楽しくやっていると、それはとちよつと違っている。それぞれの違う「自分は外国人だ」という思いは、何処から来るのだろうか。

バックパッカーのように一人、又は数人で安宿を渡り歩き、海外旅行に行くと言つても旅をしていると言つた方がふさわしい場合、自分にとつてのそんな時の「その思い」は単純に、ただ、違う文化を見に行きたい、実際に見たことの無いものを見に行きたい、そんな所から来ているので、自分がその場所ので外国人なのは、く当たり前に前提としてある物なのだ。プラス、見るだけではなく実際に触れてみると言つた意味で、現地の人や、他の外国から来た旅行者などとの触れ合いも期待していたりする。はなから見学者として自分で自覚しながらその場所にいるだけに、現地の人に親切にしてみらつたり、パブなどで誰かと意気投合したりすると妙に嬉しく思え、旅先でのほんの数時間の思い出なのにその人のことをいつまでも覚えていたりするんだらう。もう一つの、海外旅行の時の、その思いも同じことだらう。やはり大前提として当たり前のようには、それはあり、いづれもとは違う場所へ、違う文化のところへ遊びに行く、楽しみに行くという要素が、異文化を見る触れると言つ目的よりも大きくなるだけで、自分は外国人だ」という思いの質はたいして変わらない。じゃあ、住んでいる場合はどうなんだらうか。来たばかりの頃は、異文化に触れるという目的に代わつて、異文化に入り込むと言つ目的があり、見る物、聞く物全て新鮮で、驚きと学習の連続だったよな気がする。次第にそれに慣れて行き、生活するといつ観点ではたいして困ることが無くなつた頃には、外国人として異文化に



すっかり入り込んでいて、決してその外国人としての自分が無くなる訳ではなかつたことに気が付く。別にその国の人になることが目的ではなかつたにせよ、それは僕にとつてはある意味、凄く新鮮なシヨックだった。と同時に、どうしてこの国にいるのか、何がしたいのか、と言つような目的意識を再確認させられた。そんな「自分は外国人だ」という思いは、大半は苦い味がすることが多いのだが、時に嬉しかったり、心地よかつたり又は自分にとつての道しるべの様な物になつたりと、その時々によつて変化している。

その思い、どうしてそう感じるのか、という一番の原因を考えるとやっぱり言葉、言語の違いが思い浮かぶ。自分が勤勉か、そうでないかは真つ先に棚に上げておくとして、どう頑張つても、日本語と全く同じ理解力とスピードで英語の文を読むようになることはなく、それと同様に書くのもほぼ不可能である。努力次第で限りなくその日本語と英語の差は埋められるにしても、やっぱりネイティブのそれとは違う。話す、聞くについても同じで、ドラマや、映画を見ていて一〇〇%日本語と同じ理解力をもつて、全ての会話を理解するのはかなり難しい。ここまで書くと、何だか後ろ向きなことばかりあげている様に思えるが、そんなに悲観しているわけでもない。それもそれは自分日本人なのだ。「僕のバックグラウンドは日本にあり母国語は日本語なのだ」そんな前向きな姿勢で、やっぱりまだまだ覚えなくてはいけない事がたくさんあるのだなあ、と感じるのである。そんな時は少し日本を恋しく思い、また少し日本を好きになつていくのだ。

先日、違つコースに編入したので今は新しいクラスメートに囲まれている。全部で十人のクラスの中で七人がイギリス人、その中五人が女の子。クラスの女の子達は信じられないくらい速く話すのに驚いた。「えっ」と思った瞬間にもう僕の答えを待っている。しかもある程度フォーマルな場面や、友達同士でもこちらが外国人なのを気づかされて喋っているのは訳が違つ。気遣いゼロ。本当にネイティブのクラスメートに話すかのように話かけられた時はビックリした。理解するのがかなり難しい。恐ろしいくらいだ。半分くらい何を言つてるのか分からないうちがある。それでも、そんな時のあの外国人だといつ思いは、その気遣いゼロが逆に嬉し

かつたりする。同時に、すっかり怠けていた英語の勉強をやる気にしてくれさえもするから不思議だ。卒業するまでには何とか、彼女達の早さについて行けるよつになりたいたいものだ。少しビクビクさえもしながら取りあえず基本は挨拶からだらうと、ハローとバイだけは欠かさないうつにしていたりする。こ

の先、彼女達のマシンガントークについて行け、英語で無駄口ぐらい叩けるよつになれた時には、その「自分は外国人だ」といつ思いはどのよつに変化しているんだらうか。苦く感じる事は少なくなつていくことを願いたい。

(神山朝人)



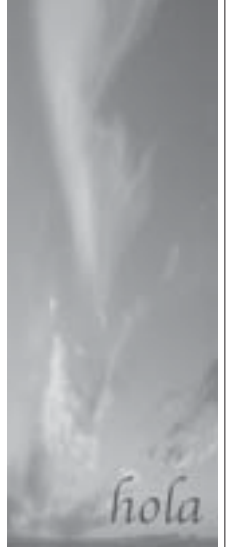




市中の建物に保存展示され日常の生活の中に生きるローマの遺構



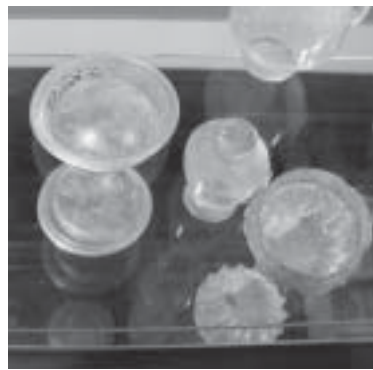
イスラムとローマの融合、ムデハル様式のアーチ



hola

コルドバの地下にはローマの遺構が眠る。二世紀、ローマ帝国はスペイン、ポルトガルを含む西ヨーロッパから小アジア一帯へ、地中海世界を支配していた。その時代の遺産である。イタリアにローマ時代の文化が残るのは当然として、地中海沿岸を西へ辿ると、フランスやスペインのさまざまな場所で、帝国の繁栄のあとを窺い知ることが出来る。同時に、ヨーロッパ世界の根底にひとつの文化が流れていることを実感できる思いだ。地中海という響きからは、紺碧海岸(コート・ダジュール)の華やかさと豊かさを連想することが多分にあるけれど、実際に地図を広げてみると、フランス国の海岸の長さはそう長いものではない。フランス一に対してスペイン二というところだろうか。そんな地中海に沿ってローマの遺構は連続する。マルセイユの西にあるニームでは、ローマ時代の都市の骨格が残るのみならず、主要な建造物が現存する美しい街である。郊外の川には、ローマ建築の特徴でもある美しいアーチ構造をした、全長三百メートルあまり高さ五十メートルほどの水道橋が今なお架かっており、当時の土木建築技術の粋を知ることが出来る。

コルドバの街は、グアダルキビルという、スペインの南西端のカディス湾から大西洋へとそそぐ、大きな川のほとりにある。街全体はなかなか河岸の傾斜にそって造られていて、もっとも河に近い、すなわち低いところに大モスク・メスキータがあり、一帯に旧市街地がひろがる。街は、



ローマのガラスの器

だんだんと丘をのぼって発展していったことになる。そして現在もその向こうへと発展している。旧市街の一角には発掘現場がある。かつてこの地には、大規模な円形劇場があったようだ。土地の傾斜を利用して造られた半円形の劇場で、円弧の直径は二四メートルというのだから相当に大きな構築物である。客席は、河へ向かって、ちよつとはつきりしないが地図で合わせてみるかぎりほぼ真南を向いていたようだ。残念なことに、ほんの一部が掘り起こされ調査されているだけで、他の大部分は、いまの生活の下に埋もれていて掘り起こしようがないようだ。まさか、あたり一帯の建物を壊すわけにもいくまい。

それにしても、フォロ・ローマーノとは比較にならないが、都市の中に唐突に空き地が出現し、二千年も前の柱や梁や石積みみの断片を目の当たりにするのである。どうも、自身のなかにある時間の感覚が少しずつ狂ってくる気がする。寧ろ、狂うという表現は適当でなく、感覚が修正されると言っべきかもしれない。時間は、グアダルキビル川の流れのように、ゆつくりと綿々と連なるものなかもしれない。転がる大理石や石に施された加工や文様の力強さは、現在の向こうへすら簡単に行ってしまうようになっている。モノの強さ、廃虚にも拘わらず、である。

隣接して考古学博物館がある。規模は小さいと言っても、それだけでもさすがに質、量ともに素晴らしい。これほどかと言っ



市内を縦横に巡るローマ時代の壁の遺構。左側に劇場の跡が記されており、右下には、競技場のような図が見える

にローマ、イスラムの世界に引きずり込まれる。まず、石そのものが違う。大理石であるが、さしずめ着物や洋服なら、生地が違う、というところである。肉なら霜降りの程度がこの上なく美しく言うことだろうし、寿司なら食べればとろける極上のトロのように、見るからに美味しそう、と言うべきか、極上の石なのである。

ローマとイスラム文化が融合したムデハルという様式は、メスキータのデザインにも取り入れられたスペイン独特の様式である。このムデハル様式でデザインされた窓まわりの装飾も、ひとつひとつが丹念に加工され組み合わされたもので、イスラムという普段馴染みのない宗教のモチーフなのに、実に自然に身体に働きかけてくる大変こころ揺さぶられるものであった。

ガラス器やセラミックも豊富に展示されていて、これまたさつと見ても格段に素晴らしい。かつて、シリアの古代ガラス器を山野で見て、繊細なかたちと微妙な不均質さと完全ではない透明さに、こんなものをもっと見てみたいと思ったのだが、はからずして出会うことができた。

市庁舎の建物はよくないが、その隣にはコリント様式の列柱が聳え、ここでも遺構が発掘されている。中学や高校の生徒達には、生きた教材となっているようだ。市中には、地下三メートルから四メートルに、ローマ時代の壁が格子状に埋まっているらしい。この壁を何らかのかたちで建築や都市に取り込むことは、単に面白いただけではなく、我々がやらなくてはいけないことのひとつのように思う。比較的新しい市街地に建つ銀行では、地下への吹抜けの部分にこの壁を保存し、内部空間としてうまく使っていた。道路からも見ることができ、そういうものに巡り合うところが楽しく豊かになる。

(篠崎健一)

### 三単現を無視？



ふるいともだちの平和をめざす夫婦です。



My love *don't* give me presents.

「わたしの彼はプレゼントをくれないの」

"She's A Woman The Beatles  
『シーズ・ア・ウーマン』ザ・ビートルズ  
以下、引用はすべてビートルズ。  
\*love = 恋人

He just *do* what he *please*.

「彼ったら自分のしたいことしかしないんだもの」

"Come Together"  
『カム・トゥゲザー』  
\*please = [動詞] ~したいと思う

三単現の s [es] が無視されたり、  
does が do になることがある。

主語が三人称、単数で、時制が現在なら、動詞の後ろに s [es] をつける。

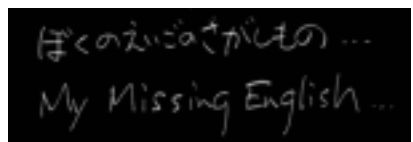
中学生のころから、わかってはいるのに「三単現の s」を付け忘れたがために減点された覚えのある人は多いだろう。確かに今でも採点する教師にとって「三単現の s」は重要なチェックポイントであり、実際の英語においても付けなければ間違いとされる。

しかし、ネイティブの間では「三単現」が無視されることがある。冒頭の2つの例は、「正しく」は

My love **doesn't** give me presents.

He just **does** what he **pleases**.

であるべきだが、そうなってはいない。ないからといって意味に違いが生じるわけではなく、困ることはないのだから不要なものはカット、ということなのだろう。日本で昨今定着した感のある「ら」抜き言葉に似た感覚である。



学校英語に忘れものありませんか？

ビートルズのほかの歌をみると、“She Loves You”を始めとして、ほとんどの場合「正しい文法」どおりに「三単現」の法則は守られている。しかし、メロディーに載せるためか、あるいは気づいた大人たちの話す「標準語」に対する反発かは定かではないが、あえて「三単現」が無視されている箇所がそのほかにもいくつかある。

If the sun *don't* come, you get a tan from standing in the English rain

「もし太陽が顔を出さなくても、イギリスの雨の中に立って日焼けできる」

"I Am The Walrus"  
『アイ・アム・ザ・ウォルラス』  
\*tan = 日焼け (get a tan = 日焼けする)  
\*walrus = せいうち

And if somebody loved me like she *do* to me

「そしてもし、誰かが彼女がするように僕を愛してくれたら」

"Don't Let Me Down"  
『ドント・レット・ミー・ダウン』

(望月)



But she *don't* care.

「でも彼女は気にしちやいない〜」  
"Ticket to Ride"  
『涙の乗車券』

い。けれども、それはあくまでも知識以上のものではないのだ。未だに、盆暮れ正月に「いなか」に帰る」という人々を見ると、その心境はどんなものか、気になるのが正直なところ。私にとっては帰る場所はいつだって「今、ここ」なのである。それに対して、盆暮れに帰郷する人々にとっては「今、ここ」ではない場所にも帰る場所がある。いなかの景色やそこに存在する人間関係を想像することはできて、農道を横切る蛇や腰の曲がったばあさんの減らず口を想像することはできて、近在に商売敵のない一軒きりの自転車屋や山の端に沈む夕陽を想像することはできて、そこに帰ってゆく人々の気持ちは計り難い。そういう意味では、今でも「いなか」は私にとっては手の届かない場所なのだ。

こうだの海の向こうだのといった壁が、性別や能力や貧富などといった壁がなくなつた世界。夢のような世界にも思える。しかし、その一方で何か失われてしまう危険性だってある。

先頃知己を得た女性は静岡県富士宮市に生まれ育つたとの由、いなかという未体験の世界に憧れを持つ私は、早速あれこれと彼女を質問攻めにした。驚いたのは方言を話題にしたときのこと。彼女は伝統的な静岡便を喋るところか聞き取ることに不自由しているのである。もはや静岡と東京都には壁が殆ど存在しなくなったのだ、と喜ぶべきか。またひとつ文化が失われつつあるのだ、と嘆くべきか。

個と全体。個が全体に吸収されてしまうのではなく、自由な個が何となく集合したものがコスモスであるような、そんな世界が実現する日は来るのだろうか。

そんなだこせつびやあーこてやあつちやちやって、まーず、とるところやんできやいいせや。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki, architect

4-3-44-1 Narita-higashi, Suginami-ku,  
Tokyo 166-0015,  
Voice : +81-3-3220-0644  
Facsimile : +81-3-3220-0640;  
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp

篠崎健一アトリエ

(一面から続く)

あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。あなた一人で悩まないでください。

相談無料  
秘密厳守

# ストーカー バスター

債権取り立て  
代行いたします

produced by

P.D.Agency

tora@pda.co.jp

1843 N. Cherokee AVE: APT. #216

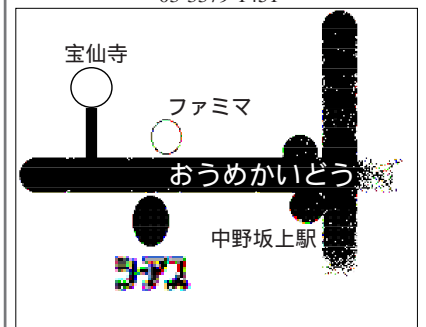
Los Angeles: CA 90028, USA

voice : +1-310-493-1001

facsimile : +1-323-466-5645

1クラス4人までの少人数制学習塾

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号  
03-3379-1451



編集後記  
からす新聞第二巻第十二号(通巻第四七号)無事、発刊できました。  
新聞に限らず、これから新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。  
次号発刊予定日は二〇〇二年十二月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。